

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節

杉山 正樹

この研究年報、第39輯に「I. 主題と説述」、その翌年には「II. *C'est ~ qui (que) ...*の構文」と題する論文を掲載してから久しくなる。そのなかで提示した疑問がまだ完全に解けたというわけではないが、理解し得た範囲内で、その解答をここに述べさせていただく。

その疑問とは、*Ce n'est pas parce que je suis libre que je ne fais plus rien.* という文を、一般の *C'est ~ que...* の構文の場合のように「僕が何もしなくなったのは、束縛のない身になったからではない」と型通りに訳したら、なぜ正しい意味を伝えられなくなるのか？ というひどく素朴なことであった。もとより、どんな文であっても、孤立して意味を伝達するのではなく、ある文脈の中に置かれて、その流れに沿って意味が生ずるのであるから、問題の文にしてもその文脈の中に置かなければ適切な意味を掴めないのは当然のことである。それゆえ、すこし長くなるが、前後の文を次に引用しておきたい。

Je parle, évidemment, pour les étudiants qui n'ont pas d'université dans leur ville, et qui sont obligés de quitter leur famille pour vivre dans la ville où se trouve leur faculté : plus de conseils à recevoir, plus d'interdictions, plus d'explications à donner. Je peux passer la nuit entière à discuter avec des amis, puis dormir jusqu'à midi le lendemain, et personne ne me dit rien. Ne croyez pas que je passe ma vie dans les cafés ou les cabarets ! J'ai

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

bien trop de travail, et ce n'est pas parce que je suis libre que je ne fais plus rien. Au contraire ! Seulement il y a une grande différence, une différence capitale : quand j'étais au lycée, on me forçait presque à travailler, et alors, bien sûr, je n'en avais pas envie. Maintenant, personne ne m'oblige à le faire. Seul, l'examen de juin sanctionnera mon travail. Mes journées, mon trimestre, je suis libre de les organiser comme je veux. Je peux aller au cinéma tous les jours pendant une semaine et ne pas toucher un livre, m'enfermer dans ma chambre et « bûcher » comme un fou pour rattraper le temps perdu. Jamais on ne me laisserait faire ça à la maison !

(J. et G. CAPELLE : *La France en direct* 2. p. 176)

原因節

2つの節が原因と結果の関係で結ばれていることを示すのに用いる代表的な接続詞には, *parce que*, *puisque*, *car* があるが, 前二者は従属接続詞, 後者は等位接続詞である。

*car*で結ばれる2つの文節は等位に置かれる以上, 2つの発話であることは当然であり, *car*以下の文節は, 原則として新情報を提示することによって, 前に述べた文節中で述べたことの正当化に使われる。

*puisque*は, DAUZATが述べているように, 時の副詞から成り立ち, 時の先行性, 後行性はすぐ原因, 結果の因果関係を論証的に表わす表現に変わるので, 話し手が既知の原因を論拠にして先に述べたことの正当化を図るという性質をもっている。これも2つの発話からなる文になる。

必要があれば, *puisque*, *car*にも少しは触れざるを得なくなるかもしれないが, ここでは紙面の都合で*parce que*節を中心にして説明せざるをえないことを前もってお断りしておく。

parce que の語源と成立ち

(フランス古語では) 副詞は, *tant que*, *con que*, *lues que*, etc. のように, 当然のごとく接続詞 *que* と直接結び付けられる。また, 接続詞慣用句のなかの副詞または前置詞になりうることのある語は, 副詞的形態を装って *ainzi que*, *ainçois que* のように慣用句のなかに入り込むことが容認されていた。

第一要素が純粹な前置詞であれば, 時に同じやり方をするを躊躇する。フランス語は常に接続詞 *que* に直接前置詞を貼り付けることに或る種の嫌悪を感じていた。(Cf. *se plaindre de ce que*, *consentir à ce que*) それゆえ, このような場合には, 進んで中性指示(代名)詞 *ce* をこの2つの要素の間に挿入し, たとえば, *sanz ce que*, *por ce que*, etc. のような形態にした。

Mes a petit de genz s'acointe

por ce qu'ele est ceenz enclose.

(HUON LE ROI: *Le Vair Palefroi*. v. 299-300)

しかし姫君がお館の奥深くお住まいゆえに,
親しくさせていただける方は少ないのです。

(神沢 栄三訳)

原因を表していた *por ce que* は, 見てわかるように, 今でも *ce* を残している *parce que* に取って代わられている。目的 (*le but*) を表す *por ce que* は, 今でも使われているが, *ce* が落ち, 短縮されて *pour que* になった。同じように, *sanz ce que* は *sans que* になる。

por que は, « *à condition que*, *pourvu que* » の意味では, この繋ぎの **ce** (**ce de liaison**) なしで済ませている。

(LUCIEN FOULET: *Petite syntaxe de l'ancien français*. Paris, Champion, 1930. p. 290-291.)

ALBERT DAUZATによれば, 原因は, そこに表されるニュアンスにしたがって, さまざまな接続詞または接続詞句によって導入される。その常

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

套的表現は説明的である。それは主にフランス古語においては、あらゆる機能を果たす能力をもっていた中性指示代名詞 *ce* と、それにつづく接続詞 *que* と、それら2つに先立つ意味を明確にする前置詞から成り立っている。

原因の単なる表明は、***parce que*** (つまり *par cela que*) の語群で指示される。

Je me tais, parce que j'écoute.

因果関係をさらにしっかりと示すためには、***du fait que*** が使われる。

Je me tais, du fait que j'écoute.

de ce que も使われるが、これは重苦しく、***à cause que*** は17世紀には、まだ普通に使われていた (« *à cause qu'elle manque à parler Vaugelas* », 「(ところが) そのたったひとりの女中がヴォージュラ先生の教えどおりにしゃべらないからといって、・・・」) (MOLIÈRE : *Femmes savantes*, II. 7) が、同じ理由で古くなった。

puisque (*puis ce que* の縮約) とその同義語 ***attendu que***, ***du moment que***, は、時を表す句が原因句になったもので、因果の従属関係を強調して、論証の意味を表わす。

« *Je me tais, puisque j'écoute.* » = *je ne peux pas faire autrement.*

attendu que は主に法律用語に使われ、***vu que*** は行政用語である。(A. DAUZAT : *Grammaire Raisonnée de la langue française*. p. 386)

ÉMILE LITTRÉ は、*parce que* が *pource que* を追放したのは間違っていると主張し、その根拠として、VAUGELAS がなぜだか *pource que* より *parce que* のほうが快い響きをもっていると言い、なによりも、宮廷でより多く使われているからといって、*pource que* 追放の片棒を担いだと嘆いている。さらに *pouquoi?* の答えに *pource que* ではなく、*parce que* を使うのは、*pour* と *par* の意味を混同していて、解せぬことだと述べ、次のような例を挙げている。

Pourquoi achetez-vous une maison ?

の問いに対して

Parce que je veux l'habiter.

と答えるが、不定法だけを使って答えるのであれば、

Pour l'habiter.

であって、ぜったいに

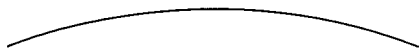
Par l'habiter.

とは答えないだろうと反対の理由を挙げているが、いかに *puriste* であろうと時勢の流れに抗することはできなかった。(E. LITTRÉ : *Dict. de la langue française*. T. 5. Article *par*. 25^o. R. 5)。

par + 名詞と *parce que* + 文節

たとえば次の文で、原因を表わす状況補語を *par sa ténacité* という *par* + 名詞にすれば全文の纏まりは緊密になり、全体は連結文で、もちろんどこにも音声の切れ目はなく、イントネーションはただ1つのなだらかな山形のメロディー曲線を描く。

Pierre atteindra son but par sa ténacité.



(メロディー曲線)

まったく同じ内容を2つの独立節を等位において、並置しても表現することができる。

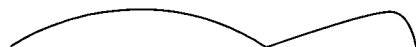
Pierre atteindra son but : il est tenace.



(メロディー曲線)

等位に置かれている2つの独立節のあいだに従属関係はなく、発話としてはあくまでも2つである。しかも、頭の中でこれらの独立節を結び付けている関係(この場合は因果関係)は文面上表現されていない。しかし、等位の接続詞を使えば、関係の性質は明らかになる。

Pierre atteindra son but, car il est tenace.



(メロディー曲線)

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

(ピエールは目標を達成するでしょう、だって [あなたのご存じ
ないと思うのでお教えしますが] 彼はこうと決めたら最後までや
りぬく人ですから)

car は等位の接続詞であるから、2つの独立節を結んではいるが、その
いずれもが独立文であることに変わりはない。この場合、話し手はまず
Pierre atteindra son but. と言ってから、自分の発話を正当化するための
論拠を *car* 以下 *il est tenace.* で述べている。したがって、イントネーシ
ョンは上記のように2つの山形を描くように発音される。

puisque を使っても同じで、従属接続詞ではあるが、自分の発話を正
当化するために、その根拠を聴き手も知っている(であろう)事柄を提示
して後から付け加える構造をとるので、発話としては2つに分かれる。

Pierre atteindra son but, puisqu'il est tenace.

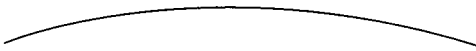


(メロディー曲線)

(ピエールは目標を達成するでしょう、だって [あなたもご存知
のように] 彼はこうと決めたら最後までやりぬく人ですから)

今度は、2つの独立節の因果関係を客観的に述べる *parce que* という
従属接続詞を使って結び付けると、

Pierre atteindra son but parce qu'il est tenace.



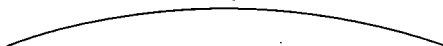
(メロディー曲線)

となり、*parce que* の前にはヴィルギュールが挿入されず、全体が1つ
の発話になり、イントネーションはただ1つの山を描く⁽³⁾。これは、*sa*
ténacité の内容を文節に変えて表現しただけであって、*par sa ténacité* の
場合と同じになる。

同じ内容でも、「ピエールが目標を達成するだろう」ということが聴き
手には未知のこと、つまり話し手が告げる新しい情報で、話し手は「彼
が目標を達成するであろう」ことを或る既知の(あるいは周知の)原因

の結果として提示する場合、原因節を先行させることも可能である。そうすれば、*Il atteindra son but.* は常に話し手がこの発話のなかで告げる新情報となり、「彼の強固な精神が目標達成の原因となるだろう」の意味に限定される。

Parce qu'il est tenace, il atteindra son but.



(メロディー曲線)

この語順にはサスペンス効果を生むという表現力がある。話し手は、先に原因を言うことにより、次に述べる結果に期待をもたせ、それを強調する。なお、この場合 *Parce que* 節と主節の間にはヴィルギュールを置かなければならないが、たとえそのためにごく僅かな声の休止があるとしても、メロディー曲線は1つの山形を描き、*parce que* 節の終わりで下降することはない。

以上、ほぼ同じ内容を6通りの表現を使って表わした6つの文のなかで、文中の1つの要素(この場合は原因を表す状況補語もしくは従属節)を抽出し、*c'est ~ que...*の構文を使って、~の部分に挿入して使えるのは、1つの山形イントネーションを描く文だけ、つまり発話単位として1つになっている文だけである。これは、*c'est ~ que...*の構文が発話単位を構成する1要素を強調するものである以上、当然のことである。

→ *C'est par sa ténacité qu'il atteindra son but.*

→ *C'est parce qu'il est tenace qu'il atteindra son but.*

なお、同じ原因節といっても、話し手が自分の発話を正当化するときを使う、*car* 節、*puisque* 節をこの構文を使って強調することはできない。発話単位が2つになっているからである。

接続詞 *parce que*⁽¹⁾

parce que に接続された主節を P、従属節を *parce que* Q と表記することになると、*parce que* は P と Q という2つの文節で表されている事柄

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

の内容に働きかけ、その2つから1つの新しい観念、Pの原因行為の観念を構成する。これを

P *parce que* Q.⁽²⁾

と書き表わす。「Pの原因はQである」という意味である。

したがって、

Jacques est parti *parce que* Pierre est venu.

という文があるとすると、その断定的性格は *parce que* があるからではなく、主文に直説法が置かれているからである。この断言行為は「Pの原因はQである」という内容に関係している。別の言い方をすれば、話し手は肯定的態度を取り、QとPを結ぶ因果関係の存在に関して責任をもつ、ということである。

P *parce que* Qのタイプの文はただ1つの発話行為を構成する。つまり、QとPのあいだに因果の絆が存在することを肯定している行為である。

しかしこのタイプの文が2つの発話行為が次々と起こることを表すこともある。この場合には、話し言葉であれば少なくとも声の休止が、書記言語であればヴィルギュールがPと *parce que* Qのあいだに必要となる。

単一の発話行為

P *parce que* Qは、「発話単位」と呼ぶことができるものを形作っている。すなわち、単一の発話行為

- 1) 事柄Pの原因が何であるか
 - 2) 事柄Qが何の原因であるか
- } を断定する、

という単一の発話行為に基づいているということである。

Il l'épouse *parce qu'*elle est riche.

彼が彼女と結婚する(P)原因は彼女が金持ちだ(Q)からだ。(Pは聴き手に既知)

彼女が裕福であること(Q)が彼の結婚する(P)原因である。(Pは

聴き手に未知)

Pと *parce que* Qは、聞き手に**事柄Pと事柄Qのあいだに原因と結果の関係があること**を知らせる単一の発話を構成している。結局、P *parce que* Qで伝えられる本質的情報は、この因果関係の存在である。

しかしながら、「P *parce que* Q」の中に含まれる構成要素は2つの異なるやり方で働くことがある。それは

Qが $\begin{cases} Pの全体と因果関係で結ばれるか, \\ Pの述部のみと因果関係で結ばれるか \end{cases}$

による。

この交替はPの主語が数量詞 (*quelques, peu, la plupart, tous*) を含む場合にはっきりと顕われ、2つの異なる解釈が可能である。

Peu de gens sont venus à la réunion parce qu'il faisait beau.

1) 集会にはほんの僅かな人しか来なかった(P)原因は晴天(Q)である。(晴天が、その集会にはほんの僅かな人しか引きつけなかった原因として提示される)

2) 晴天だったという原因で集会に来た(Q)のは、ほんの僅かな人(P)であった。(晴天が集会に来るための原因としてはほんの僅かな人に対してしか有効でなく、大部分の人は他の理由で来た)

この2つの解釈はそれぞれ文のイントネーションの上昇部と下降部の区切りが違うことから起こる。(|はイントネーション曲線の頂点を示す)

Peu de gens sont venus à la réunion | parce qu'il faisait beau.

Peu de gens | sont venus à la réunion parce qu'il faisait beau.

最初の読み方をした時だけ、*c'est ~ que...*の構文を使って原因従属節を強調できる。

C'est parce qu'il faisait beau que peu de gens sont venus à la réunion.

これとは反対に2番目の解釈の場合に使えるのは次の構文だけである。

Il y a peu de gens qui soient venus à la réunion parce qu'il faisait beau.

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

parce que で表わされる従属接続詞が、PとQの2つの文節を1つにまとめようと、2番目の原因節Qを初めの文節Pの述部だけに関係させようと、文全体はただ1つの内容を含んでいるので、それはひとまとめで単一の発話の対象である。因果関係の性質そのものについては、あまたのニュアンス (*motif, mobile, raison, prétexte, occasion, condition...*, etc.) を取り得るので、ここでは分析しない。

I. P *parce que* Q. という定型のなかで、話し手が「Pの原因はQである」と断言することは、Pが真実であることを当然のこととして受け取るということである。この場合、話し手にはPが真実であるということが反論の余地のない自明のことと考えられているので、Pから出発して、その後でその原因Qを提示する。P *parce que* Qの肯定は、結局Qを説明することになるのだと言われる所以である。*parce que* が *pourquoi* の質問に答えると言われる時にも同じことが言える。ある子供に

Tu es malade *parce que* tu as trop mangé.

と断言するとき、その子があたかも

Pourquoi suis-je malade ?

と病気の原因を質問したのに答えたかのような感じを与える。

しかし、このような質問が病気の現実をすでに前提としている限り、明らかにこの質問に対する答えもまた同じ前提を含んでいる。このように、Pが真であるという前提をあらかじめ立てることは、*parce que* を使ってその原因を説明することに強く結び付けられているので、Pの文中に *peut-être, probablement, sans doute, certainement* のような話し手の判断を表わすモーダルな価値をもつ副詞が付加されたとしても、前提自体は変わらない。これらの副詞が提示している問題は、P節によって表わされている事柄Pの確かさの度合いではなく、この事柄の原因として述べられていることの確かさの度合いである。

Il l'a $\left\{ \begin{array}{l} \text{peut-être} \\ \text{probablement} \\ \text{certainement} \\ \text{sans doute} \end{array} \right\}$ épousée parce qu'elle était riche.

(彼はたぶん [おそらく, きっと] 彼女が金持ちだから結婚したのだ。)

= La cause $\left\{ \begin{array}{l} \text{probable} \\ \text{certaine} \end{array} \right\}$ de son mariage est qu'elle était riche.

(彼の結婚の考えられる [おそらくの, 確かな] 理由は, 彼女が金持ちだったからだ。)

と言うとき, 話し手は「彼は彼女と結婚した」ことを断言し, 疑問, 推測の副詞は原因にしか関係しない。

Ⅱ. 話し手はQを必ずしも聴き手に既に知られていることとして提示しているのではない。ましていわんや未知のことと決めつけて提示しているわけでもない。

Je l'aime parce qu'elle est gentille avec moi.

ここで問題になっている彼女の優しさは, この断言以前には聴き手に知られていない可能性があり, 聴き手はそのことについて話されるのを初めて聞いたのかもしれない。

もし話し手がQの真実性を認めることができなければ, 話し手自身はQをPの原因と見なすことはできないはずである。他方, 聴き手はPとQのなかに描かれる事柄を既に知っている必要はない。

しかしながら, 原因を構成している事柄が聴き手にとって初耳である可能性があっても, それはあくまで可能性の域にとどまり, その事柄が聴き手に未知である必要性はない。或ることの原因を構成している事柄は, 話しかける相手に既に知られている可能性が大であり, 周知のことである可能性すらある。

Je suis là parce que tu m'as appelé, et non pour mon plaisir.

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

(僕がここにいるのは君が呼んだからであって、好きこのんで
いるわけではない)

この場合、原因になる事柄もその結果も聴き手に既知のこととして提示されるので、この発話を聞いて聴き手が知ることは、すべて既に個人的に知っている2つの事柄を1つに結び付ける因果関係だけである。

Ⅲ. 因果関係を表わす発話がひとまとまりで従属節として使われ、主文に嵌め込まれることもある。

J'ai peur qu'il ne l'aime parce qu'elle est riche.

(私は彼が彼女の金に目が眩んだために愛しているのではないかと懸念している。)

これが可能であるのは、*parce que* *il l'aime* と *elle est riche* のあいだで肯定された関係という意味的な単一性を持っているからである。この繋がりが主文で懸念された対象である。

= *J'ai peur qu'il n'y ait un lien de cause à effet entre son amour et le fait qu'elle soit riche.*

ここで懸念されているのは「彼の愛と彼女の富」の因果関係による繋がりである。

Ⅳ. 主文が否定の場合⁽⁴⁾、原因体系の全体が否定される。

P parce que Q の文で告げていることは、実際、因果関係そのものであり、コミュニケーションの目的として提示されるのは因果関係である。

標準例文としての肯定の発話を

Il l'aime parce qu'elle est belle.

とすれば、その唯一の目的は、2つの文節を結ぶ因果関係の存在を告げることであるから、それを全体として否定することは可能であろう。否定はまさに、その原因・結果の繋がりで意味の単一性を形成する関係を

否定すること、「愛の原因は美である」ことをひとまとめにして否定することから成り立っている。そのとき、主文の動詞が否定される。

Il ne l'aime pas parce qu'elle est belle.

LE BIDOIS 兄弟によれば、このような否定構文のなかには次のような言い回し

Il faut que tu ne meures pas. → Il ne faut pas que tu meures.

にある非論理的な否定の左方上昇があるという。非論理的といわれてしまえば、反論の仕様もないが、否定は、禁止・否定を示す文節中に置かれて、文が始まるとすぐに、表現の全体を支配する動詞（主動詞）のかたわらで表明される。話し手は発話のなかに否定があれば、それを真っ先に表明したいという本能的な欲求をもって、論理的構文より、話者の心にある否定的、禁止的なものすべてを、極端なエネルギーをもって即座に目立たせ、取り出して見せたいのである。これがおそらく否定の左方上昇と呼ばれる現象の原動力であり、そのために主文の動詞が否定されることになるのだが、その意味の係りようには2通りある。

1) まず「原因・結果の繋がりで意味の単一性を形成する関係を否定する」こと、つまり標準例文をひとまとめにして否定する「愛の原因は美である、というわけではない」の場合は、「*parce que*で形成される文節をひとまとめにして否定する」ことと同じになり、否定の意味は原因節のみに係り、主節 P は肯定の意味を失わない。このとき、(愛の)本当の理由を表す原因節を *mais parce que...* と続けることもある。

Il ne l'aime pas parce qu'elle est belle (, mais parce qu'elle est riche).

彼が彼女を愛しているのは美人だからではない (金持ちだからである)。

= *Il l'aime, non pas parce qu'elle est belle (, mais qu'elle est riche).*

だが、「*parce que*で形成される文節がひとまとまりで否定されること」をもっと明確に表わそうとすれば、*C'est ~ que...*の構文を否定にして使

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

えばいい。

Ce n'est pas parce qu'elle est belle qu'il l'aime.

(彼が彼女を愛しているのは、彼女が美人だからではない。)

または、主題の前に *si* を置き、題述を *ce n'est pas* で否定し、次のように言っても、主題、題述の位置が変わるのでニュアンスの違いは出るが、大筋の意味は変わらない。

S'il l'aime, ce n'est pas parce qu'elle est belle.

2) 否定がP節とQ節の因果関係そのものに係り、結果を否定することによって両節の因果関係そのものを否定する場合、つまりQという原因ではPという結果にはならないということを表す場合である。この場合は少し特殊なニュアンスを提示する。たとえば次の例文、

Ça n'est pas parce qu'on n'a pas le sou qu'on n'a pas le désir d'être généreux.

(ROGER-FERDINAND : *Chotard et C^{ie}*, Ⅲ)

(一文なしだからといって、気前よくなりたいたいという気持ちがないわけではない)

この場合は、「ある既定の事柄 (*on n'a pas le sou* = 一文なしである) が原因になってはいるが、そのことが原因でかくかくしかじかの結果 (*on n'a pas le désir d'être généreux* = 気前よくなりたいたいという気持ちなくなる) が導き出されるはずである、と解釈してはいけない」と断言しているのである。ここで否定されているのは、2つの文節の間の因果関係全体である。この文では、否定の対象は原因節ではない。この文の意味するところは、申し立てられている「一文なし」という原因が、「気前よくなりたいたいという気持ちを失わせる」という結果を産み出すことはない」ということである。*parce que* に先立たれ、否定の主文に従属している原因節が、このように、ある事柄が期待できるかもしれない結果をもたらさないこと、そこに因果関係存在の検証をしてはいけないことを意味することはよくある。

くどいようだが、前に挙げた例文を使ってこのことを、あらためて検証してみよう。

Il ne l'aime pas parce qu'elle est belle.

第1の解釈 既に述べたように否定は原因節に係る。「彼が彼女を愛している原因は彼女の美しさではない」(美人だから愛しているわけではない、愛しているわけは他にある)。この係り方は、数としては圧倒的に多い。

Ce n'est pas parce qu'elle est belle qu'il l'aime.

= *S'il l'aime, ce n'est pas parce qu'elle est belle.*

第2の解釈 否定は因果関係の存否にかかわり、結果が否定されることによって因果関係の存在が否定される。

「彼女が美しいからといって、彼が彼女を愛しているわけではない」(彼女の美と彼の愛には因果関係の繋がりが無いことは、彼が彼女を愛していないことでわかる)

Ce n'est pas parce qu'elle est belle qu'il l'aime.

(彼女が美しいからといって、彼が彼女を愛しているわけではない)

つまり、常識的にはPとQのあいだには因果関係が成立するのに、それを或る特定の状況のなかで否定する、したがって結果的には*parce que*が原因を提示しながら、おのずと譲歩・逆説的な意味を含み、その原因で起こり得たかもしれない結果、起こることが期待できる結果を特定の状況のなかで否定することになる(一般的通念に従えば、「美人なら愛される」はずだが、彼と彼女の間柄では、彼は彼女が美人だからといって愛するという結果にはならない)。

では、結果が否定されることを明確にするために、標準例文を2つの発話に分離し、

Il ne l'aime pas, parce qu'elle est belle.

とすると、この文は「彼は彼女を愛していない、その原因は彼女が美女だからである」となって、原因節には譲歩の意味が含まれず、「彼は—

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

般的に美人が嫌いであり、彼女が美人だという原因があるので、彼女を愛していない」と、意味がまったく違う文になる。もっとも、過去に美人を愛して、散々浮気をされたとか、金使いが並外れて荒かったとか、我侷がすぎたとか、尻に敷かれて苦勞したなどという苦い経験の持ち主ならば、わからないでもないが、そのことが周知のことでない限り、あるいは聴き手に知られていない限り、やはりおかしな意味の発話ということになるのではなからうか。たとえば、その文意を

Il ne l'aime pas, et cela bien qu'elle soit belle, mais parce qu'elle est coquette.

(彼は彼女を愛していない、それは彼女が美人ではあるが、浮気者だからだ)

のように主節と原因節の2つの発話に分けて説明すれば、もっとすっきりした文にはなるが、これには *C'est ~ que...* の構文は使えない。

さらに、この因果関係の不在をもっと明確にしようとするなら、結果を表す主文の前にたとえば、*il ne faut pas croire que* などの句を置いて、主文を肯定形のままにしておけばよい。この場合、*parce que* 節を主節に先行させることが多いが、それは絶対条件ではない。

Parce qu'elle est belle, il ne faut pas croire qu'il l'aime.

(彼女が美しいからといって、彼が彼女を愛していると思っはいけない。)

こうすれば、原因節に自然に譲歩のニュアンスが含まれ、ある原因から期待できる結果が産みだされないこと、因果関係の検証をしてはならないことを表現することができる。

Il n'est pas dit qu'on s'établisse écrivain parce que l'on saura mieux écrire.

(ALBALA: Art d'écrire 2.)

(いつか文章がうまく書けるようになるだろうからといって、それで作家として身を立てられると決まっているわけではない)

= *On ne s'établira pas écrivain, parce que l'on saura mieux écrire.*

= *Ce n'est pas parce que l'on saura mieux écrire que l'on s'établira écrivain.*

Parce que j'ai été un imbécile à ce moment-là, il ne s'ensuit pas que j'en suis un aujourd'hui. (BRIEUX : *Bourg*. II. 5)

(あの時、私が馬鹿だったからといって、今日も馬鹿者だということにはなりませんからね)

= *Bien que j'aie été un imbécile à ce moment-là, je n'en suis pas un aujourd'hui,*

= *Ce n'est pas parce que j'ai été un imbécile à ce moment-là que j'en suis un aujourd'hui.*

これらの例文を見ると、こうした用法では、原因節が主文に先立つことが多いことがわかる。

こうした場合によく使われる常套句は

Ce n'est pas une raison pour..., parce que ~

Parce que ~, ce n'est pas une raison pour...

である。

Ça n'est pas une raison, parce que je ne suis pas un assassin, pour qu'il n'y ait plus d'assassin sur la terre !

(LEROUX : *Fauteuil hanté*. 142)

(わたしが人殺しではないからといって、世の中に人殺しがいなくなるというわけではない)

Parce qu'on est mauvais poète, ce n'est pas une raison pour être bon comédien. (DAUDET : *Petit Chose*, 303)

(へぼ詩人だからといって、よい役者になれないというわけではない)

これに標準例文の否定形を当てはめてみると、

Ce n'est pas une raison pour qu'il l'aime, parce qu'elle est belle.

(彼女が美しいからといって、それで彼が彼女を愛しているというわけではない。)

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

さて、ここで本題に戻ると、出発点になった

Ce n'est pas parce que je suis libre que je ne fais plus rien.

という文を、普通の *C'est ~ que...* の構文の場合のように (ということ は、*que je ne fais plus rien.* を主題にして、原因節を否定する) 「僕が何もしなくなったのは、束縛のない自由の身になったからではない」と型通りに訳したら、なぜ正しい意味を伝えられなくなるのか? というひどく素朴な疑問であった。

その第1の理由は、初めに挙げた少し長い文の流れのなかにある。この主人公「僕」= *je* は、親元を離れて大学に入ったばかりの大学生、高校時代のように、やれ勉強しろ、規則を守れといったうるさいことを言う人もいなければ、束縛もない。そもそも、勉強しろと強制されれば、それだけで勉学意欲も失せる。したがって、大学生になった今、友達と徹夜で議論を交わし、翌日昼まで寝ていても誰も文句を言う人はいない。そういう束縛のない自由の身になれたのだから、「人間は (あるいは若者は) 怠惰である」という一般通念からすれば、「何もしなくなって、無為の日々を送る」というのが当たり前なのに、「僕はカフェや酒場に入り浸るところか、やることは山ほどあって、忙しい日々を送っている」という文脈のなかでの発言である。ここでは「自由の身になった」という原因から生ずる可能性のある「もう何もしなくなった」という結果を否定することによって、この因果関係は存在しないと断言する発話である。したがって、意味するところは、

Ce n'est pas parce que je suis libre que je ne fais plus rien.

= *Parce que je suis libre, il ne faut pas croire que je ne fasse plus rien.*

(束縛のない自由の身になったからといって、僕が何もしなくなったと思ってはいけません。)

と解釈しなければ、正しい意味は伝えられない。したがって、次のように訳せる。

束縛のない自由の身になったからといって、僕が何もしなくなっ

たという $\left\{ \begin{array}{l} \text{わけ} \\ \text{こと} \\ \text{の} \end{array} \right\}$ ではない。

上記訳文の「わけ」「こと」「の」は、どれを使っても、だいたい同じ意味になると思うが、それを含めてフランス語の原文と日本語の訳文を照らし合わせて検討してみよう。

1) まず、「～からといって」の「から」(接続助詞)は『広辞苑』第5版によれば、原因・理由を示す接続助詞で、…のために、…ので、とその意味が説明され、現代語の例文の1つに「疲れたからって、休めない」が挙げられている。この「疲れたからって」は「疲れたからといって」の縮約形であろう。

2) 「といて」と、すぐ後に出てくる「という (わけ)」については、同じく『広辞苑』に、言う㊦④(普通、助詞「と」に付いて) 提示された事態をとりたてて断定または認定して、下の叙述につなげる。実質的な意味を失い、…のことばで表示されるものである、…である、などの意を示す形式化した用法、とした上で、万葉集5「天地は広しと言へど」。「そういう状態だ」「眠いといったらない」の例文が挙げられている。

『角川必携国語辞典』には「と言う」という項目があり、ここに該当する意味として③とくにとりたてる意味をあらわす。「これという特徴もない」「生きるということは」▶ふつう、かな書き、とある。

3) 「て」については(『広辞苑』)【助詞】(助動詞ツの連用形の転ともいうが、形容詞の連用形や副詞にも付くことから、ツとは別語とする説もある)活用語の連用形、副詞などに付く。連濁で「で」となることがある。

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

① (接続助詞) 前の語句を受けて後の語句に続ける。

② 後の事態の成り立つ条件を示す。

① 逆接の条件を示す。…のに。…でも。源氏物語松風「抱きおろされて泣きなどしたまはず」。方丈記「汝、姿は聖人にて、心は濁りにしめり」。「見て見ぬふりをする」

訳文で、「自由の身になったからといても」と、最後に「も」を付ければ原因節に譲歩の意味をもっと強く出せるので、この方がいいかもしれない。その「ても」についても『広辞苑』で調べてみると、

ても【助詞】(接続助詞テに係助詞モの添ったもの。イ音便の一部・撥音便に続く時は「でも」となる)

① 仮定の条件をあげて、後に述べる事がそれに拘束されない意を表す。たとい…ようとも。…とも。(以下例文省略)

② 事実をあげて、それから当然予想されることと逆の事柄を述べるのに用いる。…たけれども。狂、拔殻「此様なる因果の有様になりても、命といふものは惜しい物で御座る」。「これだけ言ってもわからない」

以上で、*parce que je suis libre* という原因節が、この場合、一般通念に逆らう結果を導入する部分になっているので、おのずと譲歩の気持ちから逆接を表しているので、「束縛のない自由の身になったからといて(も)」という日本語に相当することがわかる。

さて、*ce n'est pas parce que je suis libre que je ne fais plus rien.* のなかの帰結節は原因説のなかに述べられている事実から期待される結果にはならないわけなので、「僕がもう何もしなくなったというわけではない」という訳文になるのだが、そのなかの「わけではない」とした部分は、「ことではない」または「のではない」にしても、おおよそ同じ意味を表すことになると思われる。今度は、それについて検証してみよう。

ここで参照した研究書は、主に寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味』Ⅱ. 第6章, 2. 説明のムード (くろしお出版, 1997, 第11刷), および河

西良治『少ししか食べるわけではない』-記述否定とメタ言語的否定,
工藤真由美『彼は風邪くらいでは休まないよ』-否定のスコープと焦点,
『塩も入れないと、美味しくならない』-とりたて詞と否定 (月刊『言語』,
特集「否定の意味論」2000, No. 11) である。

① 初めに「わけだ」は、寺村氏の説では、ムードの助動詞として見るべきだと述べているが、ムードとはフランス語の le mode (叙法) にあたるが、「ムードの」で modal (話者の判断, 発話の際の心的態度を表す) の意味であろう。

「わけだ」は「名詞+だ」につくときは、

初めてのお国帰りだ→初めてのお国帰り { のわけだ。
というわけだ。

となるが、後者のほうがよく見られる。

「わけ」が先行する修飾節を受け、判定詞「だ」を従えて名詞的述語になる場合は、その「わけ」は「原因・理由 etc.」という実質的な意味をもった名詞として使われ、「わけ」をそれらの名詞と入れ替えることも可能である。

これがあのととき所長が突然怒り出したわけだ。

しかし、次のような文中に使われた「わけ」には、それができない。

信吾は東向きに座る。その左隣に、保子は南向きに座る。
信吾の右が修一で、北向きである。菊子は西向きだから、
信吾と向かい合っているわけだ。

(川端康成『山の音』)

ここでの「わけ」は、「菊子は・・・信吾と向かい合っている」ことが、先行する文節に述べられていることからの当然の帰結であることを、話者が聴き手に述べようとするときの、話者の態度を「わけだ」によって表しているのである。ここでの「わけだ」の「わけ」は、「理由」という意味をもつ名詞ではない。その証

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

拠にこの「わけ」を「理由」という名詞に置き換えることはできない。

菊子は西向きだから、信吾と向かい合っている理由だ。

では意味が通らない。むしろ「結果になる」を入れたいぐらいである。一般的な形で言うと、「Pわけだ」は、1つ、もしくは幾つかの既に事実として確認されている事柄 (Q_1, Q_2, Q_3, \dots) からの当然の帰結として、ある事柄Pがある、ということを言おうとする用法である。

信吾は東向きに座る・・・ Q_1

その左隣に、保子は南向きに座る・・・ Q_2

信吾の右が修一で、北向きである・・・ Q_3

菊子は西向きだから・・・ Q_4

→ (当然の論理的帰結) 菊子は信吾と向かい合っている。

→ 菊子は信吾と向かい合っているわけだ。

このように確定した事実Qから推論して、その最後の文節に原因・理由を表す助詞「から」で締めくくり、その当然の帰結としてPであるというのが、上の用法である。フランス語にすれば下記のようなになる。(なお、ここでは原因節が多すぎるので、*parce que* を使うと文体上の問題が出てくるので、Q (前提) → P (帰結) の形をとる)

Shingo s'assoit face à l'est ; à sa gauche, Yasuko s'assoit face au sud. A la droite de Shingo est Shûichi, qui fait donc face au nord. Kikuko est assise face à l'ouest. *Par conséquent*, elle se trouve face à face avec Shingo.

日本語の「わけだ」には、Qからの当然の論理的帰結としてPであるということを示す (この場合は、「Pということになる」と言い換えることができる) 用法もある。

次に「わけだ」の否定形だが、これには3つの形がある。

- ① ……わけが(は)ない。
- ② ……わけではない。
- ③ ……わけにいかない。

これを順次解説すると、とても紙面が足りない。ここで問題になるのは、②の「……わけではない」の形なので、これについて解説する。

一般に「P(という)わけではない」は、話者がまずQという発言をして、それに対して聴き手は当然Pという帰結を推論するであろうと想像し、その推論を否定する、というのが基本的な用法である。

ベニザケは日本ではとれない。(中略)日本ではとれないと書いたが、ゼロというわけではない。

(読売新聞『野生の四季』森暉雄記者, 1984. 6)
筆者がまず「ベニザケは日本ではとれない」と書く。すると、これでは読者のほうは、「まったくとれない」と考えるだろうと想像した筆者は、「文字通りゼロではなく、ゼロに等しい」意味だと断り書きを入れる必要性を感じる。その心理が、「ゼロというわけではない」という言い方に表れる。

また、 $Q \rightarrow P$ という推論が、世間一般の常識、社会通念になっていて、「Pというわけではない」が、その世間の人々の思い込みがちな常識、考え方を否定する意図をもつ場合も多い。たとえば次のような使い方の場合である。

老人は、きれいな自然のなかの養老院に入れれば、幸せになれるというわけではない。

これをフランス語に訳してみると、いろいろあるが、次のようにも書けるだろう。

Ce n'est pas parce que les personnes âgées peuvent habiter dans un asile au milieu d'une belle nature qu'elles seront toujours heureuses.

Ⅲ. 否定主文に従属する parce que 節 (杉山)

もう解説の必要もないが、「老人は、きれいな自然のなかの養老院に入れれば、幸せになれる」と世間の人々が思い込みがちな常識、考え方を否定しているのである。

こういうわけで、問題の出発点になった文

Ce n'est pas parce que je suis libre que je ne fais plus rien.

を、

僕が束縛のない自由な身になったからといって、何もしなくなつたというわけではない。

と訳すのは、je suis libreという確定した事実Qから推論して、当然の帰結としてのP = je ne fais plus rienを否定するのが、上の用法である。つまり、je ne fais plus rien parce que je suis libre. という因果関係は、一般に期待されるようにはこの場合存在しない、ということを表し、その関係全体を否定する形をCe n'est pas parce que ~ que...という慣用句を使って表現したということである。この場合、Q（既定の事実）という原因からPという結果にはならないということ言いたいわけで、que je ne fais plus rien. は既定の前提にはなりえないので、これを「僕が何もしなくなつたのは」と訳すわけにはいかない。それゆえ、基底にある文は、Parce que je suis libre, je ne fais plus rien.（自由が原因で、もう何もしない）で、この因果関係の成立を否定しているとするべきであろう。

なお、蛇足的な説明を付け加えると、河西氏の論文によれば、「～ないわけではない」の構文は二重否定にも使われる否定表現で、たとえば「食べなくてはならない」という二重否定構文もあるが、「食べないわけではない」という文が一般的によく使用される構文である、とされている。

「～のではない」「～ことではない」については、「の⁽⁵⁾」も「こと⁽⁶⁾」も先行する文節を名詞化し、それに断定・解説の助動詞「だ」の第2連用形「で」と、取り立ての「は」を付けて否定

の対象を主題化して、「の」「こと」の係る文節(問題の文中の場合は、「もうなにもしない」)をひとまとめに否定している構文で、両者とも、QだからPという、前提→必然的帰結そのものを客観的に否定しようとしている構文である。大筋での意味は同じだが、「～わけではない」に比べて主観の色合いが少ない点が相違点と言えなくはないだろう。

註

- (1) 以下は、参考文献に挙げた諸論文、なかでも、Le groupe $\lambda-1$: *car, parce que, puisque* (Revue romane), エレーヌ・ヴェルレ著、尾形こずえ訳『フランス語難所めぐり』(月刊「ふらんす」1991年4月～9月号)、KR. SANDFELD: *Syntaxe du français contemporain, Les propositions subordonnées* (Droz, 1965)、GEORGE et ROBERT LE BIDOIS: *Syntaxe du français moderne, T. II.* (Editions A. et J. Picard et C^e, 1967) などから随所、取捨選択し要約したものであり、例文もそのなかから取ったものが多い。それをいちいち挙げるのは煩瑣にすぎるので、以後必要な場合に限って註を付けることにする。
- (2) Pは前提、Qは結論を表す。ある事柄P(命題)を確定した事実として聴き手に認識させ、それとQとが因果関係を結ぶことを示す *parce que* をあいだにして推論すると、当然Qという結論が得られることを客観的に述べる形式である。
- ただし、P *parce que* Qの場合には、Qが原因であるからPとなる、というようにQが前提となる原因の内容を表し、その結果当然の結論としてPという結論を得られる、という逆転現象が見られることがしばしばある。これら2つの場合に含意される客観的な情報はほぼ同じであるが、思考の方向は反対である。その場合も表記はP *parce que* Qと統一する。
- (3) 実際にはPが次の発話から切り離されることがしばしばある。この分離は特別の発話行為の対象になるということのしるしである。このために、P *parce que* Qを単一の発話行為とすることと、表面的には矛盾することがある。

主節が否定で、*parce que* 節がそれに続く場合、主節と従属節で1つの山形イントネーション曲線を描く場合と、それぞれが独立した山形イントネーション曲線を描く場合、つまり単一の発話か、2つの発話かによって、否定の作用領域が変わる。2つの発話の場合、意味の上でも、*car* 節、*puisque* 節との関係が微妙になるが、ここでそれを詳説する紙面がないので、この点については省略する。ごく初歩的なことしか書いていないが、BALLYの説を紹介しておく。

次の文

Je ne sors pas parce qu'il fait trop chaud.

は(文脈次第で)2通りの意味を持っていると思われる。つまり、

- 1) La trop grande chaleur n'est pas la cause de ma sortie.

暑すぎるのが私の外出の原因ではない。(暑すぎるから外出するのではない、外出の原因は他にある)

- 2) La trop grande chaleur me decide à ne pas sortir.

暑すぎるのが私に外出しない決心をさせる。(暑すぎるので外出しない)

しかしながら、1)の解釈では文は連結文であり、2)の解釈では、音声の休止で2つに

Ⅲ. 否定主文に従属する parce que 節 (杉山)

分けられている等位に置かれた2つの文である。後ろの文は初めの文の付加説明部 l'épexégèse (後から付け加えられた補足・説明を目的とする語群) である。(CH. BALLY: *Linguistique générale et linguistique française*. § 276. p. 173. note)

- (4) これから述べることは違って、否定がP節だけに係ると解釈することも不可能ではない。この場合、否定されるのはP節の表す事柄で、理由のほうは真実として提示される。

Il ne l'a pas épousée parce qu'elle était riche.
= La cause de son non - mariage a été qu'elle était riche.
= C'est à cause de sa richesse qu'il ne l'a pas épousée.
= C'est parce qu'elle était riche qu'il ne l'a pas épousée.

彼は、彼女が金持ちだから彼女と結婚しなかった。
= 彼が結婚しなかった理由は、彼女が金持ちだったことだ。
= 彼が彼女と結婚しなかったのは、彼女の富のせいだ。

この場合も、あらためて本音の説明を付け加えて、次のように文を続けることができる。

Il ne l'a pas épousée parce qu'elle était riche et qu'il ne voulait pas d'une femme qui le domine.

・・・そして彼は亭主を尻に敷く女性を望んでいなかったからだ。

これら2つの解釈のどちらが適切かは、文脈で決まる。

- (5) 「の」のこの場合に当てはまる意味を手元にある辞書で見ると次のようになる。『岩波国語辞典、第5版』「の」③対象化するのに使う。この「の」に終わる結合全体で1つの体言と同等の働きとなる。▽この用法を格助詞から分けて、準体助詞や形式名詞とする説もある。『角川必携国語辞典』「の」⑤上にくる語に名詞の資格を与える。・・・もの、・・・こと。例文。「走るのがおそい」▽この用法の「の」を「準体助詞」という。くだけた言い方では「ん」に変わる。「わたしがやったんです」。『新明解国語辞典、第4版』「の」④上の語を体言として扱うことを表す。「来るの (= こと) がおそい」、etc.
- (6) 『岩波』「こと」【事】①④〔活用語の連体形に付け〕それが表す内容を思考の対象とする意を表す。「死ぬことはいやだ」「読まないことにする」、etc. 『角川』「こと」【事】①(形式名詞) ①活用する語の連体形に付いて、体言の資格をあたえるはたらきをする。「いやなことはいやだ」▽同様の機能を果たす準体助詞の「の」に置き換えられることが多い。『新明解』「こと」【事】①人間に行為のひとつま。「見ることが出来ない」『広辞苑』こと【事】(もと「こと(言)」と同語) ①意識・思考の対象のうち、具象的・空間的でなく、抽象的に考えられるもの。「もの」に対する。②言ったり考えたり行ったりする中身。④(活用語の連体形に付いて) その活用語を名詞化し、また、その語句全体で経験・習慣・必要・状態等を表す。「見ることは信ずることである」「行ったことがない」「早く寝ることにしている」「急ぐことはない」「まずいことをやった」

なお、「の／ということ／こと／の」の交替については、参考文献に挙げなかったが、上山あゆみ『はじめての人の言語学 ― ことばの世界へ』(くろしお出版, 1991) p.95でも言及されている。

Ⅲ. 否定主文に従属する *parce que* 節 (杉山)

参考文献

(ここには I. 『主題と説述』, II 『C'est qui (que) ...の構文』に載せたものと辞書, 辞典の類は省略した)

エレース・ヴェルレ著, 尾形こずえ訳『フランス語難所めぐり』(月刊「ふらんす」1991年4月～9月号,)

中村秀夫『日本語のシンタクスと意味, II』(くろしお出版, 1997)

月刊「言語」Vol.29:特集[例解]否定の意味論, (大修館書店, 2000, 11, No. 11)

曾我 祐典著『フランス語における状況補語の表現法, 構文・動詞叙法の選択』(白水社, 1992)

ALBERT DAUZAT: *Grammaire raisonnée de la langue française* (Collection les langues du monde, 1952)

LUCIEN FOULET: *Petite syntaxe de l'ancien française* (Champion, 1930)

G. et R. LE BIDOIS: *Syntaxe du français moderne, T. II.* (Editions A. et J. Picard et C*, 1967)

Le groupe λ - l : *Car, parce que, puisque* (Revue romane 10, 1975. PP. 248～280)

MICHEL MARTINS-BALTAR: *De l'énoncé à l'énonciation: une approche des fonctions intonatives* (Collection CVIC, Didier, 1977)

CLAUDE MULLER: *La négation en français* (Droz, 1991)

POTTIER, B: *Linguistique générale* (Lincksiek, 1985)

POTTIER, B: *Théorie et Analyse en linguistique* (Hachette, 1992)

(フランス文学科 教授)